【概要・ビジョン】NPO法人賀谷藻場保全会（長崎県対馬市／対馬市賀谷地先）

令和の里海づくりモデル事業

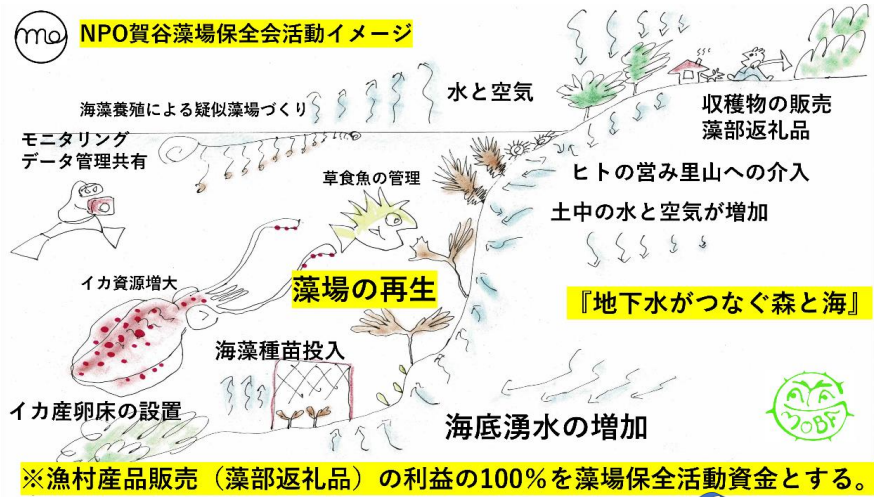
取組	里山・里海の水循環回復による藻場再生と普及啓発・産品販売の仕組みづくり
概要	かつて豊かな海藻が広がり、海のゆりかごと呼ばれた、対馬賀谷の海の森再生へ向け、漁業者に限らず、多方面から志を持った住民が集まり、保全活動を展開。モデル事業では海底のモニタリングや藻場再生、山への植樹、普及啓発・産品の販売等を組み合わせた活動を実施。
背景	
地域資源	• 暖流の対馬海流等の影響を強く受け、栄養塩類が多い豊かな漁場。 • ツシマヤマネコをはじめとした対馬固有種も多く見られるなど、固有の生態系を有し、特に生物多様性保全の重要度が高い地域。 • 複雑な海岸線が続き、山と海からなる雄大な自然風景。
地域課題	• 2023年4月時点で対馬の沿岸部の全ての藻場が消失。以後、海藻は復活していない。 • 対馬全域の海藻の消失は現在も進行中であり、海洋生態系に及ぼす影響と漁業従事者に与える打撃は甚大であると考えられる。

保全と活用の好循環形成に向けた将来ビジョン

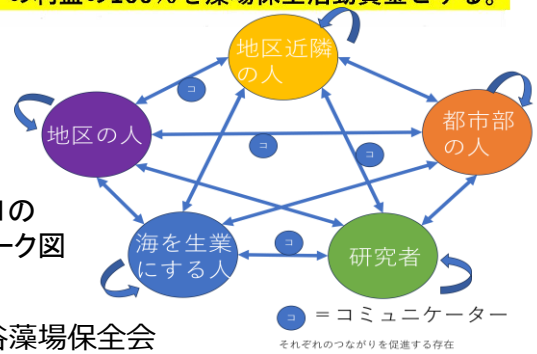
【保全】
- 科学的知見に基づいた保全活動を展開するために、九州大学と連携し、海底のモニタリング調査を実施。
- 藻場再生のため、海藻の種苗投入や、海藻を食害する生物の天敵となるアオリイカの資源保護に向けた取組を実施。アオリイカの資源保護のために、間伐材を活用した産卵床を海中に投入している。
- 土壌の海への流入防止など海底湧水と水の循環を重視した観点から、里山再生活動を実施。

【活用】
- 藻場再生や里山保全の一貫で収穫・生産した産品を販売。
- 活動に賛助する人たちによる応援会を組織し、活動の様子をパンフレットで周知する他、上述の賀谷の産品を返礼品として送る。

【好循環形成・促進】
- 活動に様々な団体や個人を巻き込むことで、活動の輪を広げるとともに、新たな商品・サービスの開発を進める。
  - ✓ 飲食施設での賀谷の産品の利用
  - ✓ 保全活動の体験プログラムとしてツアー販売の検討
  - ✓ 新たな加工品開発の検討、等
- 各種普及啓発活動や応援会などを通じて、賀谷の関係人口を創出する。普及啓発活動は域内の学校への出前講座等を実施。



生態系の循環イメージ図



関係人口のネットワーク図

作成：賀谷藻場保全会

【成果】NPO法人賀谷藻場保全会（長崎県対馬市／対馬市賀谷地先）

令和の里海づくりモデル事業での取組	
取組	里山・里海の水循環回復による藻場再生と普及啓発・産品販売の仕組みづくり
主な実施内容	【令和4(2022)年度】 • 定期的な藻場モニタリング調査（健全な水循環回復に向けた順応的管理 • カジメ種苗投入（生育観察、遊走子供給）、アオリイカ産卵床製作・設置（海藻食害魚を捕食するアオリイカ個体数減少対策） • 里山管理（植林、下草刈り、果樹生産・畑作業等） • 地域・学生・消費者向け普及啓発リーフレット等制作 • 好循環形成の方向性等の検討、など 【令和5(2023)年度】 • 前年度からの保全・再生活動の拡大：定期的な藻場モニタリング調査、カジメ種苗投入、アオリイカ産卵床製作・設置、里山管理 • 保全・再生活動の教材作成・学習プログラム開発 • モニタツアー等によるエコツアー開発 • 賀谷産海産物の商品開発・販売体制検討 • 好循環形成ビジョン・アクションプラン検討、など
成果	• 順応的管理による藻場保全・再生活動の継続的実施体制の確立した。継続的データ取得による再生手法検討基盤を形成した。 • 過度の商業化と一線を画し強い支持層を引き付けて活動を応援する関係人口を創出することで無理しすぎず継続するマイクロ好循環の仕組みを形成した。 • 上記のための環境学習、エコツアー等のプログラム・ツールの整備、賀谷海産物提供体制の形成に繋がった。
今後の課題・展望	• 藻場再生には地道で継続的な活動が必要。その継続基盤を形成。取得データ等をもとに効果的な再生へ繋げていくことが今後の課題。 • 今後の展望として、メンバーが、金銭的・気持ち的に負担なく活動できる仕組みを模索。関係人口とのネットワークの中でのコミュニケーションを促し、リーダー等の一部の人に負担が集中しない仕組みを目指す。

藻の食害魚の天敵となるアオリイカの産卵床

里山づくり活動で出た間伐材を活用

藻場再生の様子

保護枠（食害魚から種苗を防除）のなかで生育するカジメ

風の草刈りの様子

里山と里海の地下水の循環を再生するための造園技術

海底モニタリングの様子

海藻の景観被度や水温、照度を測定

新商品開発

未利用資源に着目し、藻場保全を応援できる商品を開発

海底湧水ワークショップ

里山と里海の地下水の循環によっておこる海底湧水の体験イベント